

明るい社会を目指して

神戸市立本多聞中学校一年 尾林香里

私が視覚障害に興味をもったきっかけは、学校での盲導犬の出張講座でした。盲導犬の働きはとても素晴らしいと思ったのですが、盲導犬の数はとても少ないようで、盲導犬に頼ることができない視覚障害者の方々は、どのような生活をされているのか、知りたいと思いました。

「目が見えない」ということは、私も少し気持ちがわかります。私は強度の近視で、眼鏡のない生活は考えられません。小学校二年生頃から急に視力が落ち、ほとんど見えなくなっていました。視力検査をする度に低くなる数値、分厚くなっていく眼鏡。いつか目が見えなくなってしまうのではないかと、とても不安で、今でも視力検査は苦手です。

視覚障害についてパソコンで調べていると、視覚支援特別学校で、夏休みに公開講座があると知り、参加してみることになりました。

この講座では、視覚障害についてのくわしい説明や、視覚障害者の立場からの話、アイマスクを装着しての視覚疑似体験、手引きによる歩行介助の実習、点字体験など、視覚障害に関する様々なプログラムを学ぶことができました。

視覚支援学校と聞いて、私は学校が特別な造りになっているのかと思っていましたが、廊下の横幅が広いと感じたこと、階段前に点字ブロックがあること以外私達の学校との違いはあまり見られず、壁には、とても上手な絵の生徒作品やポスターが掲示されていて、びっくりしました。お話によると、全く見えない全盲の方の数は少なく、ある程度は見ることのできる弱視の方が多いそうです。弱視に関わる要素としては、視力、視野、色覚、光覚があり、見え方は千差万別だそうです。

視覚障害についての説明の後には、光を感じる程度の視力しかない方が視覚障害者の立場から、お話をして下さいました。小学校の時、大好きな野球の練習中に球が見えなくなったことが、病気に気がついたきっかけだったそうです。その後病気は進行していきましたが、目が見えないことを誰にも相談できず不安な毎日を送る中、初めて苦しい思いを打ち明けることのできた親友に、「できないことを探すのではなく、今できることを探してみればいい。」という言葉をもらい、その言葉をきっかけに気持ちが前向きになり、目が見えなくてもできることにどんどん挑戦していくことができたと言っていました。生き生きと話して下さる姿は、私の想像していた視覚障害者の方の姿ではなく、笑顔がとてもまぶしく見えました。親友の方の言葉は心に残るもので、私も今の自分にできることを沢山したいと思いました。私が本多聞中学校の生徒だとその方に告げると、その方は垂水の健康公園で時々伴走の方とマラソンを楽しんでいるそうで、「本多聞中学校の陸上部の生徒がとても元気にあいさつしてくれるんです。」と、話して下さいました。私は陸上部ではないけれど、自分がほめられたよううれしくなりました。

その後、視覚障害疑似体験があり、二人一組で、一人がアイマスクをして、もう一人が手引きによる歩行介助をするという体験をしました。そこで大切なことは、「視覚障害者イコール介助が必要」ではなく、困っている様子があれば、「お手伝いすることはありますか？」という一言からスタートするということです。私は知らない方とペアになり、とても緊張しました。学校内のグラウンドと手すりのある階段という、安全な場所とはいえ、アイマスクでさえぎられた光のない世界にとっても戸惑い不安な中、手引きをして下さった方が私のことを考えて歩く速度をそろえてくれたり、声かけをして下さったことを感じ、とてもうれしかったですし、私もペアの方が安全に歩けるように様々な声かけや、動きやすい動きを行えるよう心がけました。

相手のことを思って行動する、声かけをするということは、障害のある方との間だけに関係することではなく、普段から私達が心がけなくてはいけないことです。陸上部の人も、その方が視覚障害の方だから、あいさつをしたわけではないはずです。困っている時に声をかけ、助けてくれたら誰でもうれしいし、元気なあいさつをお互いに行うことができたら気持ちのいい一日を過ごせる気がします。私はこの体験を通じて、視覚障害の方の全てを知れたわけではありませんが、相手のことを尊重する気持ちがあれば、対等な関係で、一緒に歩んでいくことができるのではないかと思いました。視覚障害者の対義語は晴眼者というそうです。私達だけが晴れた空や、世界を独占してしまうのではなく、皆があいさつをするような自然な助け合いができる、明るい社会をつくっていききたいです。